

## 璉城寺（紀寺）総合学術調査 2

佐久間 貴士  
堀 裕  
荒 武 賢一朗

### 要旨

本論は璉城寺総合学術調査の二〇〇八年度の概要報告である。昨年度までの概要報告は『論集』第45号に掲載した。

堀裕は、江戸時代に写された『璉城寺縁起写本』の書き込みや、無名人撰の『璉城寺紀』と共に、延享二・三年（一七四五・六）に書かれており、璉城寺中興の僧実啓と関わる可能性があることを示唆している。

荒武賢一朗は古文書整理作業の進捗状況を報告している。本年度は三百点の調査を作成し、全体の7割の調査ができた。またデータベース化も開始した。文書は住職家の「下間家文書」と、寺に伝わる「璉城寺文書」に大別される。荒武は「下間家文書」の概要を報告し、西本願寺の有力な坊官であった下間家の幕末から明治期の諸活動を報告している。

佐久間は発掘調査の概要報告である。本年度新たに第4区を設定し、約一四m<sup>2</sup>を発掘した。近現代の盛土を除去すると、調査区西端で東西に石列が発見された。江戸時代再建の本堂が建つ現在の地面とほぼ同じ高さにある。寺の敷地の東側には江戸時代に土塀があった。石列は土塀から約1m離れて平行して並んでいた。石列の設置年代は江戸時

代から近代と推定されるが、まだ確定していない。第4区の調査は来年度も引き続き実施する。

### はじめに

奈良市西紀寺町45にある璉城寺の総合学術調査は二〇〇八年度で四年目である。璉城寺は奈良時代に行基が創建し、平安時代に紀有常が再興したと璉城寺所蔵の『璉城寺縁起』は伝えている。総合調査の目的は璉城寺の歴史を知るために古文書調査・発掘調査を中心に行ってきた。

総合調査は日本文化史学科と大阪樟蔭女子大学地域文化センターの共同事業で実施している。また日本文化史学科では、昨年度から授業として取り入れている。本年度は三回生を対象に「地域歴史総合研究」「日本文化総合研究」の科目である。調査指導は本学の教員が当たり、調査は本学学生・神戸大学考古学研究会・璉城寺友の会などの市民の協力をえて実施している。

また二〇〇八年度は本大学の特別研究助成費の交付を受けた。特別研究費の交付は今年で三年目である。

## 一 調査の経緯と調査体制

### (一) 調査の経過

古文書調査は「下間家文書」と「璉城寺文書」に分けて調査を作成している。

璉城寺は法相宗・浄土宗・天台宗と変遷し、一九三四年（昭和一九）に住職として下間玄恵が入り、浄土真宗となった。下間家の祖先は初め親鸞上人に任せ、戦国時代には武将として活躍し、江戸時代には本願寺の有力な坊官を多数輩出した。玄恵家はその内の宮内卿家と呼ばれた家で、西本願寺に仕えた。そのため璉城寺には江戸時代天台宗であった時期の璉城寺の古文書と、下間家に伝来した古文書とが残されている。古文書調査は「下間家文書」から開始し、五箱ある内の八割の調査を作成した。また今年から「璉城寺文書」の調査作成に着手した。

発掘調査は 二〇〇五年度に第1区（四㎡）、第2区（三㎡）、二〇〇六・二〇〇七年度に第3区（一五㎡）を調査し、二〇〇八年度は第4区（一四㎡）を調査中である。調査区の大半は近現代の盛土やごみ穴であったが、第3区で室町時代の遺物包含層（或いは溝）を確認し、第4区で江戸時代或いは近代の石列を確認している。

遺物量はコンテナで第1区一箱、第2区二箱、第3区二五箱、第4区一九箱である。遺物との種類は古墳時代と奈良時代から近代までのすべての時代を含んでいる。奈良時代の瓦は多量に出土しており、璉城寺が奈良時代創建であることが確認されている。

### (二) 調査体制

調査組織は以下の通りである。

璉城寺（紀寺）総合学術調査団

代表 佐久間貴士 教授 考古学

調査指導 堀裕 准教授 古代史

長谷川伸三 非常勤講師 近世史

荒武賢一朗 非常勤講師 近世史

中村直人 非常勤講師 中世史

調査参加者（一回生）牛尾晴江・浜本聡美

（二回生）西奥明香・丸太弥佳

（三回生）荒井淳子・尾崎悠・片岡舞子

川合陽子・北窪佐知・妹尾千晶・竹田温美

戸田千尋・俵谷有香・水嶋文香・吉本絵梨花

（四回生）石川有賀・大西まどか・川畑輝恵

小嶋京子・小嶋千尋・西田桂子・浜本智代

日野美香・吉田梓乃

（神戸大学考古学研究会）猪狩明浩・石田有美

宇古・熊野悟・北野慎二・富田晋吾・西澤渉

浜口雄太・藤本順平・和田拓実

（璉城寺友の会・地域住民）下間景甫住職

一箭忠三・一箭雅宜・子安美沙子・徳田裕英

徳田絹江・徳田菜穂子・野尻幸男・牟田口淳  
小林祥浩

第4次の調査期間は二〇〇八年八月三〇日から九月八日で、八月三〇・三十一日は機材の搬入を行い、実際の調査は九月一日から行った。九月七日は休日とした。

## 二 『璉城寺縁起』写本とその書込みについて

現在、璉城寺（現在の寺号は「璉城寺」とする）には、『璉城寺縁起』（二巻）が伝えられている。現在みられるような形に編纂された時期は、次のように考えられる。上限は、『璉城寺縁起』に、虎関師鍊の『元亨釈書』が引用されていることから、元亨二年（一二三二）であり、下限は、村井古道の『奈良坊目拙解』が『璉城寺縁起』を引用していることから、享保二〇年（一七五〇）となる。その編纂時期は、おそらく中世後期と推測されるが、その詳細については、後日改めて報告したい。今年度の調査の中でとくに注目すべきは、近世において右縁起を写したとみられる『璉城寺縁起』写本（以下、『縁起写本』とする）を目にすることができた点である。『縁起写本』には、外題・内題ともになく、冒頭がほぼ二行欠落しているものの、軸を付け、裏打ちされるなど大切に伝えられてきた様子がうかがえる。また、朱筆による返り点や、読み仮名、送り仮名、墨筆による書き込みも行われている。今回は、墨書によるある書込みに注目して報告したい。

その書き込みとは、『縁起写本』に、五箇所にわたって、縁起本文に記された年、たとえば「天平十七年」が、延享二年（一七四五）、ないし三年まで何年経過しているのかを墨筆で書き込んでいるものである。

延享二、三年とはいかなる年なのであろうか。

ところで、『大日本仏教全書』（寺誌叢書第三）には、『璉城寺紀』（二巻）と題する史料が掲載されている。（同じ内容を掲載する東京芸術大学図書館所蔵『璉城寺縁起』並崇道天皇御神（一冊）を<sup>並崇道天皇御神</sup>実見する機会を得、写本であることを確認している。）

この『璉城寺紀』の内容は、璉城寺所蔵の『璉城寺縁起』とは異なり、ほぼ『奈良坊目拙解』の該当部分を写したものに他ならない。しかし、その奥書は『縁起写本』の墨書き込みと関連しており興味深い（以下の傍線は堀）。

右、紀寺郷璉城寺縁起並紀寺崇道天皇神社縁起者、享保年中今出河又齋老人所被著述焉。蓋璉城寺開基及中興来由等、未詳全篇乎。案号紀寺者、平城御宇自高市郡引徙而紀氏之寺院無疑乎。号璉城寺者、後世所造立之而崇道天皇神祠之神宮寺別当之梵宇無疑乎。竊按、載于元亨釈書璉城寺其初可在於山村八嶋本宮地乎。後世移建于南都紀寺郷。処不有莫其謂矣。頃日璉城寺現住沙門、須以古・新伝来縁起勘考之旨、因及再三、暫令新縁起書写訖。尚校合他説・異本等而為編輯矣。

延享三<sup>丙寅</sup>歲九月下浣日

無名山人  
六十六歳書写

この奥書の筆者である「無名山人」は、璉城寺所蔵『璉城寺縁起』を

〔印面ヲ示ス〕 〔印面ヲ示ス〕

「古」「伝来縁起」とし、『奈良坊目拙解』の記述を「新縁起」と称している。その上で「璉城寺現住沙門」が、「無名山人」に対して、「古・新伝来縁起」を「勘考」するように「再三」求めたため、「無名山人」は「新縁起」（つまり『奈良坊目拙解』の記述）を書写させ、この『璉城寺紀』を完成させたのだという。そして、この奥書の日付が「延享三年」なのである。

この点を踏まえ、今注目する『縁起写本』の書込みの主体を考えれば、それは「現住沙門」もしくは「無名山人」の可能性が高い。ところで、野尻幸男氏と長谷川伸三氏のご教示によれば、この時の「現住沙門」は実啓であり、璉城寺の近世中興に尽力した人物であった。ならば、璉城寺の中興にあたり、寺の由来への関心が高まるとともに、縁起への関心や検討が進んだ結果、縁起写本への書込みがなされ、「古・新」縁起の「勘考」も同時に行われたのだと考えられる。

なお、当該期の璉城寺中興についての詳細な検討は、後日公表される長谷川伸三氏等の考察を俟ちたい。

### 三 古文書整理作業の状況

前号で紹介したように、璉城寺所蔵の古文書は「璉城寺文書」と「下間家文書」に大別できるが、今年度調査も引き続き「下間家文書」を中心に整理作業を進めた。

内容調査の作成は、前年度まで未着手であった「下間家三」（六七点）の全点、および「下間家四」（約三〇〇点）の八割近くまで終了し

た。今回三〇〇点近くの調書が新たに作成されたことになる。これにより、下間家文書の五箱すべてに調書作成が及び、全体の七割程度まで基礎作業が完了した。今回の該当史料には、下間家の由緒書・系図に関わるものと、江戸時代後期から明治時代にかけての書状・はがき類などが多数を占める。そのなかで新たな事実の発見も、奮闘する調査参加者にとって喜ばしい出来事であった。例えば、下間頼和の長女「お陽」（後述の下間玄恵の姉にあたる）は幕末期に幕府京都代官・角倉与一家に嫁いでいるが、今回その婚儀に関わる書類が確認されるなどの成果を得ている。これらの新出史料によって少しずつではあるが、この史料群の性格を深く理解できるようになった。

また今年度調査では、内容調査の作成と平行して文書目録の完成に向けたデータベース化（同時に調書の点検も兼ねる）も開始した。この作業は、「下間家一」（六〇点）の全点と、「下間家二」（約三六〇点）のうち「玄恵師関係」（一七一点）の三割程度まで進めることができた。以下、その成果を明らかにしておきたい。

#### ◎ 「下間家一」の概要

「下間家一」のデータベース化と点検作業は今回で終了した。年代的には、文政一〇年（一八二七）から昭和四一年（一九六六）にかけての文書が含まれている。そのうち、昭和四一年とあるのは、新聞記事（「西本願寺北能舞台は徳川家康の建立」）の切り抜き一点のみで、この文書箱は江戸時代後期から明治時代初期にかけての史料が大部分を占

める。内容から大まかに分類すると、①西本願寺からの通達・宗派関係、②教義関係、③書状類、④金銭貸借関係、⑤和歌・謡曲・書籍、などに区分される

①には、前号で述べた「石田小右衛門出播につき覚」（文書番号一、以下番号のみを記載）のほか、西本願寺宗主からの御染筆を写した「別段御書下ケ御染筆之写」（五一）、院号・法名を授けられた際、下間仲潔が西本願寺に宛てた文書の写し「院号法名御染筆御頂戴につき書上」（二九）などがある。また、西本願寺が隠居中の「下間新法印」に勤務を命じた「下間新法印隠居ながら堂勤仰付につき御達書」（一六）、明治九年（一八七六）一月作成された下間家の家祖である蓮位坊の六百回遠忌についての「委任証」（五七）など、宗派と下間家の関係を示す書類も特徴的であろう。そのほかにも、有吉市左衛門という人物から下間大藏卿に宛てた「書状」（五六）では、有吉が御門主様（宗主）から御書を拝領した御礼を述べてあり、下間家が担った「取次」の実務を窺わせる内容も明らかになった。

②の教義関係には、作成年代が不明であるが「護身法（浄三業・仏部三昧耶・蓮華部三昧耶・金剛部三昧耶）」（三一）などが含まれる。

③の書状類は、下間家の交際を考えるうえでも重要で、また実に多様な人的諸関係を示すものである。宗派内部の人々との日常的な連絡も多いが、本務を離れた私生活の一端を垣間見ることができよう。例えば、「栄以」なる人物から下間家に届けられた芝居見物の誘いを伝える「書状」（一七）、下間源三郎からの問い合わせに対して茶道裏千家・千宗

室の返答が述べられた「書状」（四二）などが存在する。

④については、下間家、西本願寺双方に関係する文書の混在が指摘できるが、明治八年（一八七五）の年末から翌九年の正月にかけて交渉が進められた彦根在住の小野田小一郎、江坂久蔵両名との貸借関係が認められる（七・一九・三四・三五・五五）。

⑤では、明治二年（一八六九）八月に「松舞」という人物が呈上した「釋貞寿靈前江手向（和歌七首書上）」（二三）、下間頼和の作である「春頼旧（和歌二首書上）」（二五）、同じく「和歌五首書上」（五四）などがある。さらに、作成の年代は定かでないが、謡曲「羽衣」の写本（二〇・二二）が二冊確認できる。書籍では、江戸時代における京都の地誌「京羽二重大全」（三六）も収蔵されていた。

◎「下間家二」（データベース化終了分のみ）

「下間家二」の入力・点検作業は、幕末期から明治時代にかけて、まさに激動の時代を生きた下間玄恵（玄慧、頼恭）に関する「玄恵師関係」から着手した。玄恵は天保三年（一八三二）に生まれ、明治三十三年（一九〇〇）に死去しているが、今回作業を進めた文書（五五点）はその後半生にあたる明治一〇年（一八七七）から同三〇年（一九〇七）にかけてのものが中心となっている。そのほとんどは、玄恵に寄せられた書状・はがきである。

これら書状やはがきは、下間家一統、および京都在住の西本願寺関係者のほか、東京築地の本願寺別院にいる正木新吾、長谷川楚教などから

のものが多く、また、京都や東京以外にも、富山・神戸・広島・長崎などの寺院（僧侶）から送られている書状類も存在する。具体的な内容としては、日常的な宗務に関するもの、あるいは年賀状など時候の挨拶や近況報告などを含んでいる。ここで注目すべきは宛先となる玄恵の所在地（居所）であろう。今回の作業段階で明らかになったのは、明治十九年（一八八六）を境として、それ以前の郵便物は京都東山の西大谷輪番所、以後は京都市下京区大宮通り花屋町下る（西本願寺付近）とされているところである。住所の移動は、明治維新以降における玄恵の実務を探るうえでも重要であり、今後の作業でも丹念に追っていく必要がある。

次年度は、「下間家二」と「下間家四」の二箱で残っている内容調査の作成、「下間家二」以降のデータベース化・点検作業を引き続きおこなっていきたい。とくに「下間家二」の未着手文書には、前号で紹介した石田小右衛門と密接だと思われる「山崎書類」があるため、さらなる発見が期待できよう。加えて、調査の初年度から少しずつ積み重ねている文書の解説作業も同時に手掛け、璉瑠寺所蔵古文書全体の具体的な分析に着手する方針である。

#### 四 二〇〇八年度発掘調査の概要

本年度は寺の敷地の東側（本堂の裏）、第3区の北側に隣接して第4区を設定した。東西二、五m、南北五、五m、約一四mである。

ここは寺の本堂の敷地から六〇から七〇cm高く、新墓地の予定地となっている。この地点はこれまでの調査から江戸時代には本堂敷地と同じか、わずかに（一〇cm程度）高くなっていたことがわかっている。よってこの高まりは近代以降の盛土と平成時代になってから、新墓地造成によってさらに盛土され、コンクリートの擁壁が造られたことになる。本年度の調査は、この盛土を除去し、盛土下の旧表土を除去して遺物を採集した。土層は大きく第1層（昭和六〇年代から平成の盛土及び旧表土）、第2層（近代から昭和六〇年代までの盛土）である。この盛土には多量の遺物が含まれていた。第2層はさらに上層・下層に分かれる。上層は昭和五〇年代以降の盛土、下層はそれ以前の盛土で明治の遺物を含んでいる。

厚さ七〇から八〇cmの盛土及び旧表土を剥ぐと、調査区東側の壁際で石列1を発見した（写真1）。調査期間が残り少ないので、本年度はここで掘り下げを中断した。

##### （a）遺構

**石列1（写真2）** 石の上面は地表下約七〇cmである。上部を第2層下層が覆っている。石は二〇cm大の河原石で西側に面をそろえて、南北に並んでいる。この石列の約一m東側が隣地との地境である。この地境は現在コンクリートの擁壁が造られているが、戦後はトタン塀であった。それ以前は土塀があったとのことである。

この地境は江戸時代中期（一八世紀）にはすでに存在した。本年度調査した「璉瑠寺文書」から江戸時代中期と推定される寸法入り



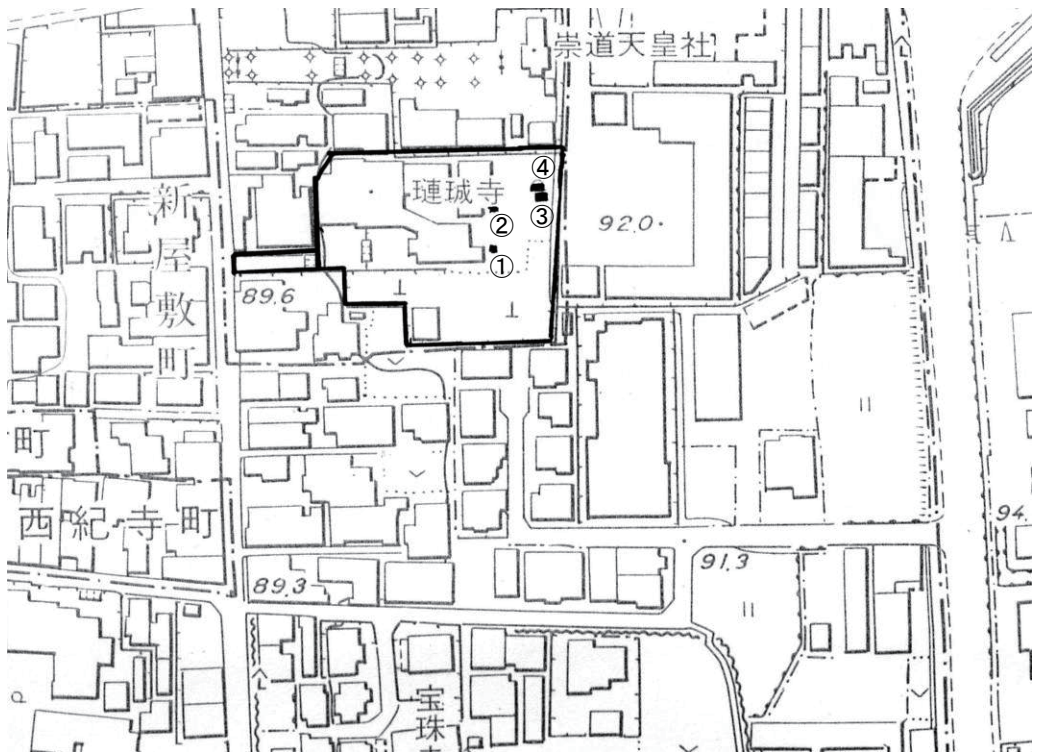
写真1 第4区全景(掘削途中)右に石列1



写真2 第4区石列1

の境内図が発見され、それによって現在の境内敷地の形状が江戸時代中期には確定していたことがわかった。この地境には「塀」が描かれ、東北隅に「木戸」が描かれている。  
 こうしたことから、この石列1は塀に沿って並ぶ区画石で、塀際の植栽を区画していたのでは「ないかと推定している。

璉城寺発掘調査位置図(縮尺1/2500、上が北)



(b) 遺物

遺物の出土量はコンテナ一九箱である。特に第2層下部から集中的に瓦が出土した。奈良時代の瓦も多く出土している。第4区の遺物は未整理だが概要は以下の通りである。今回は特に安土桃山から江戸時代初期の軒平瓦やBコビキ痕のある丸瓦が出土し、この時期に屋根瓦の補修があったことを窺わせた。

古墳時代 須恵器

奈良時代 瓦

平安時代 瓦・中国白磁

鎌倉時代 瓦・中国青磁

室町時代 瓦・中国青磁・陶器

安土桃山時代 瓦

江戸時代 瓦・土器・陶磁器・寛永通宝

近代 瓦・陶磁器

おわりに

今年雨が多く、調査期間中丸一日外で調査できたのは2日だけだった。しかし希望の遺構が発見され、境内図の発見もあって。来年度以降の調査が楽しみになった。

最後にいつもながら調査に協力していただいている下間景甫住職に厚く御礼申し上げます。また「璉城寺友の会」の皆様と地元の方には調査参加のみならず、テントの設営や食事の調理をすべてして

いただきました。地元の小林祥浩さんには飲み物の差し入れを度々していただきました。あらためて皆様に御礼申し上げます。

また本学学生と神戸大学考古学研究会の学生・OBの方々、暑い夏をご苦勞様でした。

(付記)

執筆分担は、はじめに・一節・四節・おわりにが佐久間、二節が堀、三節が荒武です。

本研究は大阪樟蔭女子大学平成十九・二〇(二〇〇七・二〇〇八)年度特別研究助成費を受けて書かれたものである。